

論文

英語ネイティブスピーカーの視点による 前置詞 of の二つの矛盾点についての一考察^{注1}

マーメット・ショーン・コリン・藤原 隆史・加藤 鉦三

A study on two inconsistencies of the preposition “of” from the perspective of native speakers of English

Sean Collin Mehmet, FUJIWARA Takafumi and KATO Kozo

要 旨

A of Bが「BからのAの離脱」を意味する場合と、逆に「AからのBの離脱」を意味する場合がある。また「Bが行為者」である場合と、逆に「Bが行為の対象」になる場合がある。このようなofの矛盾した現象も、次の2点から問題なく説明できることを本論は示した。すなわち、「of自体に語彙的意味はなく dummy Case markerとしての働きしかないこと」と「従来ofの意味として扱われてきた事象も、実際にはof以外の部分の持つ意味を見ていたにすぎない」という2点である。

また、Chomskyの dummy Case markerの守備範囲をChomskyの想定より拡張することで、例えばある種の形容詞と共起するof句がその形容詞の意味上の主語として機能することも自然に説明されることを示した。

キーワード

前置詞 of 多義 dummy Case marker 語彙的選択 文法的選択

目 次

- I. ofの二つの矛盾点
- II. (2b)の矛盾点について
- III. (2a)の矛盾点について
- IV. 主語に拡大
- V. 動詞に拡大
- VI. まとめ
- 注
- 参考文献

I. ofの二つの矛盾点

『英語多義ネットワーク辞典』¹⁾は認知意味論の考え方で英語の単語の多義を扱っている辞典である。そこでは前置詞ofの意味ネットワークを次のように捉えている。

(1)『英語多義ネットワーク辞典』のofの意味ネットワーク²⁾

- ① <全体>に部分として属する
 - ① [特性類似] 人・物事に属性として関わる
 - ①a [特性類似] 人は行為の主体として関わる
 - ①b [特性類似] 人が行為の対象として関わる
 - ①c [特性類似] 物事が中心として関わる
 - ② [特性類似] 場所に由来して
 - ②a [特性類似] 場所から離れて

このネットワークには奇妙な点が二つある。

(2)ofの意味ネットワークの奇妙な点

- a. ①-①aでは「人は行為の主体」であるが、①-①bでは「人が行為の対象」であり、両者で方向性が全く逆であること
- b. ②では「場所に由来して」であるが、②-②aでは「場所から離れて」であり、両者で方向性が全く逆であること

しかも、大変興味深いことに、(2a)と(2b)において、意味的なかたまりとされているそれぞれのグループにおいて、方向性が全く逆であるという点が共通している。このことは、(1)の意味の捉え方が全く間違っているという可能性を強く示唆している。以下、本稿では、これら二つの矛盾点の言語事実を確認し、これらの矛盾点をどう考えればいいのかを提案する。

II. (2b)の矛盾点について

(3)は『英語意味ネットワーク辞典』が②の事例としてあげている例であり、(4)は②-①aの事例としてあげている例の一部である³⁾。

(3)②「場所などに由来して」の事例

He is a man of Osaka.

She was born of a very aristocratic family.

(4)②-①a「場所から離れて」の事例

The men were all called out to clear the road of snow.

The Oscar-winning movie star said a mystery attacker robbed him of his mobile phone.

(4)にあげた「除去系」の文型はある程度の生産性がある。(5)はそれをまとめているウェブサイト^{注2}から転載したものである。(5)では、「動詞-目的語-of-モノ」という形になっていることと、動詞自体が「除去」の意味を持っているという2点が共通している。

(5)「除去系」の文型

rob 人 of モノ：人からモノを奪う

clear 場所 of モノ：場所からモノを取り除く

cure 人 of 病気：人の病気を治す

deprive 人 of モノ：人からモノを奪う

empty 容器 of モノ：(容器などから)モノを取り除く

relieve 人 of モノ：人からやっかいなモノを取り除く

rid 人 of モノ：人からモノを取り除く

strip 人 of モノ：人からモノをはぎとる

このような「除去系」の文型が成立することの解釈として、次の二つが考えられるだろう。

(6)「除去系」の文型の解釈

解釈1：「除去・分離」は動詞が持っている意味であって、ofが「除去・分離」という意味を持っているのではない

解釈2：動詞もofも「分離・除去」の意味を持っているため、整合している

解釈2は『英語多義ネットワーク辞典』の見方②-①aを踏襲するものである。従って、この解釈を採用すれば、②と②-①aがなぜ逆の意味であるのかを説明しなければならない。一方、解釈1を採用すれば、②と②-①aがなぜ逆の意味であるのかを説明する必要はなくなる。解釈1では、「除去系」の文型の「除去」の意味は動詞が持つものであり、ofはその意味に関与していないということになるからである。本稿ではもちろん解釈1を採用する。従ってofの意味に②-①aを想定することはなく、従って、②と②-①aがなぜ逆の意味であるのかを説明する必要はない。その一方で、ではofの意味をどう考えるのか、という課題を抱えることになる。ここではその課題はいったん保留し、(1)のもう一つの矛盾点である(2a)を先に考えることとしたい。

Ⅲ. (2a)の矛盾点について

(2a)を次に再掲する。

(2) ofの意味ネットワークの奇妙な点

- a. ①-③では「人は行為の主体」であるが、①-⑥では「人が行為の対象」であり、両者で方向性が全く逆であること

(7)と(8)は、それぞれ、『英語多義ネットワーク辞典』が①-③、①-⑥の例としてあげているものの全てである⁴⁾。

(7)①-③の事例

the plays of Shakespeare
The love of God is broad like beach and meadow.
The death of his daughter has changed Mr. Brown's life.
The world may be finally waking up to the rise of China.

(8)①-⑥の事例

the writing of essays
the story of Jeanne D'Arc
a teacher of history
theories of communication
the understanding of globalization
The destruction of the city hastened rebuilding plans.
Her love of nature and art has remained over the years.
I have always thought of him as a very aloof person.
This tune always reminds me of her fantastic performance at the concert.
I'm certain of it.
I am really proud of my husband.

(7)であげられている例では、全てにおいて名詞がofを取っている。名詞であるのでof + 目的語を次のように所有格に書き換えることができる。

(9) Shakespeare's plays, God's love, his daughter's death, China's rise

このことから、(7)のofの使われ方は、(10)のような通常の前置詞の使われ方と根本的に違いがあると考えられる。

(10) your answers to the question, our dependence

on him, his trust in this

(10)のような例においては、どの前置詞を使うかは名詞が決めている。そこで、(10)のような前置詞の選択のしかたを「語彙的選択」ということにしよう。それに対し、(7)でのofは、語彙的に選択されているのではない。その選択のされ方は、(10)の所有格の部分の選択のされ方と同じである。(10)では、前置詞は目的語的なものを取るために選択されている。一方、(10)の所有格の方は、「誰がそれをするのか」を示すために選択されている。つまり、所有格は名詞の意味上の主語を表示するために選択されているのである。そのような選択のされ方を、ここでは「文法格的選択」と呼ぶことにしよう。(7)のof句は、(9)で確認したように、明らかに「文法格的」に選択されたものである。そうだとしたら、(7)のofの意味を考えるとすることは、(9)の'sや(10)の所有格の意味、そして日本語の格助詞がの意味を考えるとことと同程度に無意味な作業であるということになる。これらに語彙的意味があるはずもなく、そこにあるのは「主語を表示する」という機能だけである。『英語多義ネットワーク辞典』の大きな誤りは、文法格表示に用いられる②の用法のofに対して、語彙的意味を追求してしまった、という点にある。

この考察から、名詞がofを取っている(8)の上から7つの事例についても、これらは語彙的に選択されているのではなく、文法格表示(この場合は目的格表示)のために選択されているのではないかという可能性がすぐに思い浮かぶ。実際のところ、(8)のthe destruction of the cityという例は、Chomsky (1981)⁵⁾が格理論の説明のために用いた非常に有名な例である。Chomskyの説明はおおよそ(11)のようなものである。

(11) Chomskyのthe destruction of the cityの説明⁶⁾

- ・ N(名詞)は[+N, -V] V(動詞)は[-N, +V]
- A(形容詞)は[+N, +V] P(前置詞)は[-N, -V]
- ・ 全ての名詞句は格が付与されていなければならない。
- ・ 目的語に格付与できるのは[-N]範疇に限られる。
- ・ 以上から、名詞と形容詞は目的語に格付与できない。
- ・ そのため名詞と形容詞が目的語を取るためには、その目的語に格付与するために挿入される前置詞ofを必要とする。前置詞は[-N]であるため、

前出のサイト「死ぬほど分かる英文法ブログ」では、ofを含む熟語のリストをあげている^{註3}。以下は、そこから、動詞を中核とするが、get rid ofやcatch sight ofのように動詞とofの間に動詞と目的語の組み合わせが固定化された(本当の)熟語を挟まないものを抜き出したリストである。

「～で出来ている」

be composed of～：～で成り立っている

be made up of～：～で成り立っている

consist of～：～で成り立っている

「～について」

approve of～：～を良いと賛成する

boast of～：～について自慢する

complain of～：～について文句を言う

dispose of～：～を処理する

hear of～：～について耳にする

think of～：～について考える

〈人 of モノ系〉

accuse 人 of モノ：人をモノについて非難する

assure 人 of モノ：人にモノについて保証する

convince 人 of モノ：人にモノについて確信させる

expect モノ of 人：モノを人について期待する

inform 人 of モノ：人にモノについて知らせる

make モノ of 人：人をモノにする(≡モノを人について作る)

persuade 人 of モノ：人にモノについて説得する

remind 人 of モノ：人にモノについて思い出させる

suspect 人 of モノ：人にモノについて疑いをかける

warn 人 of モノ：人にモノについて警告する

「～から(分離)」

〈人/場所 of モノ〉

clear 場所 of モノ：場所からモノを片づける

cure 人 of モノ：人のモノを治す(モノ=病気)

deprive 人 of モノ：人からモノを奪う

relieve 場所 of モノ：場所からモノを取り除く

rob 人 of モノ：人からモノを奪う

さて、本稿では、2節において、(5)のような「除去系」の文型に現れるofが「除去・分離」の意味を持っているという考え方を否定した。「除去・分離」の意味は、ofの意味ではなく、動詞が持っている意味

であると考えべきであるからである。しかし2節においては、ではof自体の意味は何であるのかについては保留とした。しかし3節と4節での考察から、of自体の意味が何であるのかについて結論を出す十分な準備が整った。3節と4節では、名詞と形容詞が取る目的語と主語を導くofは、句の中心である名詞・形容詞に語彙的に選択されているのではなく、格表示のためだけに挿入されるdummy Case markerであると主張した。さて、ある要素を文中に文法操作として挿入するような操作があるとすれば、その挿入される要素は語彙的意味を持たないと考えられる。それは、もしそのような要素が語彙的意味を持っているとしたら、その操作によって文の意味が変わってしまうからである。従って、格表示という文法的機能だけを持つdummy Case markerのofは語彙的意味を持たないと考えるのが最も簡単な仮説、すなわち、科学的に最も価値が高い仮説ということである。本稿ではもちろんそのようなofは語彙的意味を持たないと考える^{註4}。

この考え方で、2節で考察した「除去系」の文型で何が起きているのかを見てみよう。

(13)「除去系」の文型で起きていること

deprive 人 モノ → deprive 人 of モノ

→の左辺では、「人」はdepriveによって格付与される

depriveは他動詞ではあるが二重目的語を取る動詞ではない

従って、「モノ」に格付与されない

よって、「モノ」に格付与するためにdummy Case markerのofが挿入される

ここでは、格付与されない名詞句があり、それに格付与するためにdummy Case markerのofが挿入されている。その理屈は、3節と4節で見た、名詞と形容詞の場合と全く同じ過程である。違うのは、句の中心が[-N]である動詞である、という点だけである。しかし「除去系」においては、その動詞の格付与能力は「人」に対してすでに行使されており、もう一つの名詞句である「モノ」に対する格付与能力はない。この段階で、[-N]である動詞であっても、[-N]ではない名詞・形容詞と同じ状態になっているのである。このように、「除去系」の動詞についても、名詞・形容詞の場合と全く同様に考えることができるのである。

本節のリストには、「除去系」以外のものも数多く含まれている。それらについても、「除去系」の場合と同様に、ofの意味とされているものは実は動詞の意味であるという主張を展開することができるものと思われる。しかしその議論は別の機会に行うこととしたい。

VI. まとめ

本稿では、『英語多義ネットワーク辞典』が提示するofの意味ネットワークにある二つの矛盾点を検討し、それらに含まれるofは、(1)語彙的に選択されず、(2)of自身も語彙的意味を持たない要素、すなわちChomsky(1981)のいうdummy Case markerであると考えれば、その二つの矛盾点はそもそも最初から矛盾として成立していないことを示した。具体的には、②「場所などに由来して」の事例であるHe is a man of Osaka.と②-③「場所から離れて」の事例であるThe men were all called out to clear the road of snow.におけるofがお互いに逆の意味になっているのがなぜなのかをそもそも説明する必要がないということになる。さらに、①-③「人は行為の主体」の事例であるthe plays of Shakespeareと①-④「人が行為の対象」の事例であるthe writing of essaysにおけるofについても意味的な矛盾点を考慮する必要がなくなる。

上記のように考えることは、Chomsky(1981)の格付与の考え方を、主語に拡張し(3節)、さらに動詞にも拡張する(4節)ことで初めて可能になることも示した。すなわち、ofが形容詞の意味上の主語となっているIt is very kind of you to say so.のようなofの事例や、「除去系」の文型であるdeprive + 人 + of + モノにおけるofの事例などもdummy Case markerの考え方を敷衍して説明することが可能となったと言えよう。

なお、本稿では議論の出発点として『英語多義ネットワーク辞典』の解説を使ったが、そこでの説明は同書に特異なものではなく、辞書等で広く見られる一般的な内容であると言える。これは、矛盾点自体は広く気づかれてはいるにもかかわらず、それらの矛盾点が不思議なものとは捉えられていなかったことも示しているように思われる。

注

注1 本稿は、加藤のアイデアを元に、Mehmetと藤原が執筆したものである。

注2 「死ぬほど分かる英文法ブログ」(<https://shinuwakaeng.com/rob-a-of-b>:2022年12月30日閲覧)なお、このブログではこの文型を「ofは分離のイメージ」としており、本稿の主張に影響を与えているものではない。

注3 「死ぬほど分かる英文法ブログ」(<https://shinuwakaeng.com/of-jukugo-matome>:2022年12月30日閲覧)このサイトは学習者を対象としており、本稿で提示しているような抽象的・理論的な考察はしておらず、これらの熟語が可能であるのは、ofに以下の意味があるからであるとしている。そのため、本稿の理論構築においてはこのサイトの考え方を参考とはしていない。

1. ~の(A of Bの形で使われれば「BのA」)
2. ~で出来ている(構成要素・物質)
3. ~について
4. of 抽象名詞 = 形容詞
5. ~出身の(起源)、~が原因で(結果)
6. ~から(分離)

注4 ここで、dummy Case marker ではないofがあるのかどうかを本来は考察しなければならないが、紙幅の都合でそれは別の機会に譲ることとしたい。見通しとしては、dummy Case markerではないofの用法はなく、全てのofの事例が、主語表示か目的語表示か属格表示のために挿入されたものである、という主張になると予測している。

参考文献

- 1) 瀬戸賢一・武田勝昭・山口治彦・小森道彦・宮畑一範・辻本智子(編),『英語多義ネットワーク辞典』小学館(2007).
- 2) 同上, p.649を基に作成.
- 3) 同上, pp.649-650.
- 4) 同上, pp.649-650.
- 5) Chomsky N, *Lectures on Government and Binding*, Foris Publications(1981).
- 6) 同上, p.48.
- 7) 同上, p.49.